

# 谷村城下町の形成と変遷

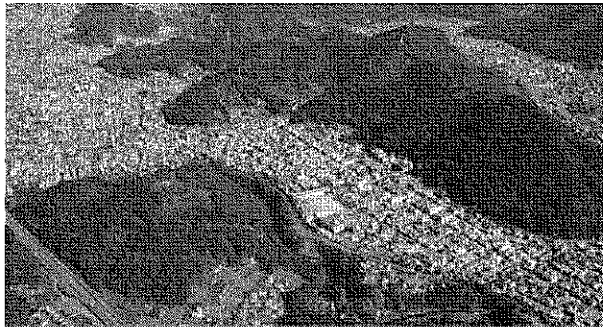
健康科学大学 奈良 泰史

## 1. 「谷村」の成り立ち

「谷村」は、現在の都留市の中心市街地である。古代には、『和名抄』に記される都留郡下7郷の内の「多良（田原）郷」に含まれ、中世には「都留郡田原郷深田村」という地名が、文安2年（1445）の武田信重向嶽庵領目録などに見られる。

この「深田村」は、現在もその地名が残る「谷村」の北東部に当たる下谷地区にあり、周辺には、平安時代の集落址である鷹の巣遺跡、滑岩遺跡、道生堀遺跡などが所在する。また、「谷村」の南西側に位置する田原地区の三ノ側遺跡では、奈良・平安時代の住居跡と共に、「和同開珎」や12～13世紀の龍泉窯系や同安窯系の輸入陶磁器の残片が出土するなど、同地区が古代から開発が進んだ地であることを物語っている。

「谷村」は、古代から開発が進んだ下谷地区と田原地区との間に位置し、第1図のように南北を山や桂川に挟まれた最も狭隘で、外的から防御するのに適した要害の地であったと言える。



第1図 現在の谷村城下町

## 2. 「谷村」が歴史舞台へ登場

「谷村」が登場する最古の史料とされているのは『勝山記』の享禄5年（1532）の条であり、「此年中、屋村へ御越候テ、新屋敷ヲ御立候」とある。

同書、享禄3年の条には、小山田氏の居館であった中津森館が焼失とあり、2年後の享禄5年、小山田越中守信有によって、「屋（谷）村」に新たに居館が築かれたことになる。以後、「谷村」は50余年の小山田氏による郡内支配の拠点となった。「谷村」は、小山田氏に始まり、徳川氏と対峙した北条氏、天正

壬午の戦いで北条氏を破った鳥居氏、江戸の徳川氏の抑えとして配された豊臣系大名たちの重要な拠点として歴史の舞台に登場した。

## 3. 「谷村」城下町の形成

「谷村」城下町の形成は、小山田氏による谷村館の建設が端緒となった。しかし、その位置は近世谷村城に被るとする説や、現在の円通院から護国神社周辺にあったとする説などがあるが、資・史料が乏しく確定には至っていない。（註1）

また、秋元氏が谷村城主であった時期は、現存する絵図によりその実像に迫ることが可能であるが、小山田氏以降、秋元氏に至るまでの間は、断片的な資・史料で垣間見るしかない。

近年、「谷村」城下町の形成に関する優れた論考が発表されている。（註2）「谷村」城下町の形成過程を論ずる上で、寺院配置確立の時期、水路整備の推移、街区に見られる2つの軸の意味などは重要なテーマであり、これらを踏まえて、城下町の形成課程について概観したい。

【第1段階】小山田氏が谷村館を築いた享禄5年から鳥居元忠が都留郡領主となった天正10年（1582）12月までの間で、小山田氏によって「谷村」に居館と別荘が建設された。また、天正壬午の戦いで「谷村」に入った北条氏は、徳川氏への備えとして勝山城や谷村烽火台などに手を加え防備を固めた。

【第2段階】鳥居元忠が都留郡領主となった天正10年から天文18年（1590）までの8年間で、西涼寺・長安寺・西願寺が建立され、長安寺は「小山田氏別荘」跡に元忠が開基となり創建された。このように、城下町の北東から南西側山麓に連なる寺院配置は、第2段階にすでに確立していたことが判る。

また、西願寺の東にある社は、天文13年（1544）の小山田信有文書に「かち屋坂天神宮」と記された神社で、「かち屋坂」の地名から同地区に鍛冶集団が居住していたことを物語っている。

さらに、各寺院の門前を流れる水路が「寺川」で、城下町の北東側から南西側の山麓エリアに水を供給

するため「寺川」の開削と寺院配置が一体となって進められたものと考えられる。これにより、現在の国道139号線南側の水利が整い、同エリアへの家臣団屋敷や町家などの地割りが可能となった。

【第3段階】文禄2年(1593)から慶長6年(1601)までの浅野氏重が都留郡領主であった8年間で、徳川家康に対する備えとして勝山城を築城すると共に、谷村を上・下谷村に区分したとされる。

この時期、勝山城の築城に伴い麓の川棚地区に家臣団の屋敷が整備された。(註3)

【第4段階】慶長6年(1601)に鳥居成次、寛永8年(1631)成次の子成行が谷村城主となった31年間で、甲府城代で徳川忠長の付家老としての任にも当たったが、「谷村」城下町整備に関する資・史料は見当たらず、関わりは不明である。

【第5段階】寛永10年(1633)、秋元泰朝が谷村城主となり、宝永元年(1704)に孫の秋元喬知が川越に転封するまでの間の71年間で、この間、本格的に城下町整備がおこなわれた。

#### 4. 「谷村」城下町の水路整備

「谷村」は、猿橋溶岩上に立地するため水利に乏しく、本格的な城下町整備には、水路網の整備は不可欠であった。

そのため、秋元泰朝は、寛永13年から同16年までの約3ヶ年を擁し「谷村堰」を整備した。(註4)先に「寺川」は第2段階で整備されたと私論を述べたが、秋元泰朝の整備は、取水量を増やすための取水口工事、谷村城や家臣団の屋敷に供給する「家中川」、町家に供給する「中川」を開削したものと考えている。

「谷村堰」は、取水口から流末まで延長約11kmに及び、これにより周辺の村々の石高は約640石の増収となった。

#### 5. 谷村城下町から代官支配へ

宝永元年(1704)12月25日、秋元喬知は川越転封を命ぜられ、「谷村」は城下町としての歴史に幕を閉じ、代官支配へ移行することになった。同2年2月、幕府の谷村城破却の命を受け、邸宅を壊し田畑とし、城の石垣を崩して溝池を埋め、唯一、高山甚五兵衛の旧宅を残して陣屋として利用された。

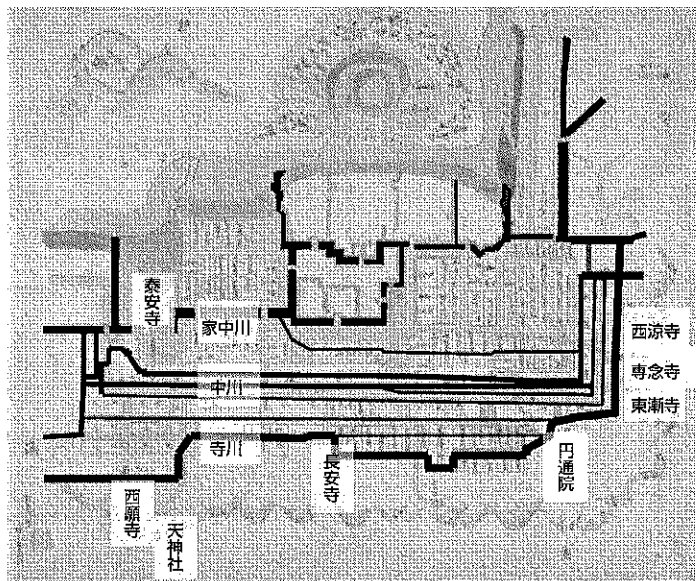
代官支配期の「谷村」を偲ばせる資料が、第3図の「城跡地地割絵図」で、秋元氏が川越に転封し20年経過した姿が描かれている。同図によると、谷村城・泰安寺・秋元家臣屋敷があった場所は畑地を示す黄色に塗られ、唯一残る建物が陣屋の施設となった高山甚五兵衛の旧宅である。街道沿いの町家とともに、谷村城の一部堀以外は城下町時代の水路がそのまま残り、今日まで続いている。「谷村」は、街区や水路、また、寺社(泰安寺を除く)など秋元氏3代71年間の城下町としての風情は今日まで継承されている。

註1 「谷村の烽火台」『都留市史資料編古代・中世・近世I』1992 都留市史編纂委員会

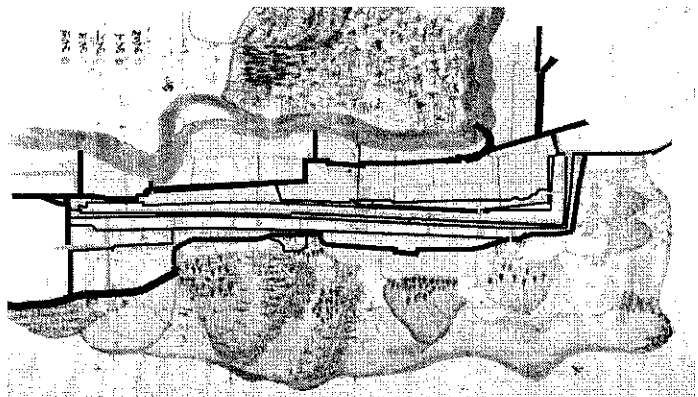
註2 伊藤裕久「第二節谷村の都市的変遷」『山梨県史跡 勝山城跡』2010 都留市教育委員会

註3 池田誠「勝山城」『都留市史資料編古代中世近世I』1992 都留市史編纂委員会

註4 『秋元家甲州郡内治績考』には、「谷村堰再興」と記載



第2図 谷村城下絵図(線は水路・筆者加筆) 宝永2年・横山家蔵



第3図 城跡地地割絵図(線は水路・筆者加筆) 享保10年・小俣家蔵